

ぶっきょうつうしん がつごう  
仏教通信1月号 『「あたりまえ」と「ありがとう」へ』

国府台女子学院 正門横の掲示板に、『「あたりまえだ」と言いながら、まだ不足を言って生きている』という1月の法語が掲示されています。児童の皆さんは、毎日、朝が来ると学校へ行き、授業に参加し、休み時間は友だちと遊んだり、読書をしたりしていることを「あたりまえ」のことと思っているのではないのでしょうか。

しかし、もしその「あたりまえ」が、実はとても奇跡的なことで成り立っているのだとしたら…皆さんの毎日はどう見えるのでしょうか。まずは「朝、元気に登校すること」を考えてみてください。朝起きて、制服に着替え、学校へ向かう。これは普通のことのようには思えますが、実はそうではありません。「身体が健康であること」「送り出してくれる家族がいること」「安全に通学できる道路や電車・バスがあること」

「学校があり友だちや先生がいること」どれか一つ欠けてしまうと、今日という「日常」は成り立ちません。世界では、学校に行きたくても行けない環境（紛争・貧困・性別等）にいる子どもの状況は、小学校10%、中学校14%、高校30%（ユニセフ2023年調査）といわれています。「登校して当たり前」だと思っている日常は、実は多くの条件が奇跡のようにつながって成り立っているのです。仏教では、この「つながり」のことを「ご縁」と説き、その陰ながらの支えや目に見えない恩恵によって自分が生かされていることに気づいて感謝する気持ちを「おかげさま」といいます。

そして、仏教には「無常（むじょう）」という根本原理の教えがあります。これは「この世界のすべては変化し続け、永遠にそのままであり続けることはない」という意味です。この「無常」である現実世界では、今ここにある幸せは決して「あたりまえ」ではないのです。滅多になく有るのが難しいからこそ、私達はそれを「有り難い（ありがたい）」と呼び、「ありがとう」と感謝の言葉を述べるのです。

最後に、児童の皆さんには「足りないもの」を探して不満を言うのではなく、今ここにある「あたりまえではない有り難いご縁」に目を向けて欲しいと思います。家族、健康、そして学ぶ機会。それらが多くの縁によって支えられていると気づいたとき、私達の心には自然と温かな「ありがとう」の気持ちがわいてくるのではないのでしょうか。合掌

